



人間工学データブック

——機器設計の人間工学指針——

近藤 武, 他訳

日本における本格的な人間工学的研究も 10 年くらいの歴史らしいが、きいてみるとこの本はやはりそういった仕事に従事する人の間でも比較的新らしい資料であるらしい。当センター、リハビリテーション工学科のスタッフにこの本を奨められて読む機会を得た。豊富で綿密なデータは、われわれ PT, OT 場面でも実用的で大いに活用できる。われわれの業務の中にも Ergonomy が入ってきたが、患者の本物の社会復帰を考えるには、環境、機器との調和、動作分析を無視することはできない。また、PT, OT 的見地から提案される分析やデザインは共にリハビリテーションチームを構成するエンジニアの重要な参考意見となろう。本書は、第 1 章人間—機械系よりはじまり情報の視覚的表現、聴覚表示、言語伝達と続く。特に参考となるのは後半で、第 6 章、操作具の設計の項では手足の問題点が詳しく分析されている。座席の設計についてはわれわれが車椅子を考えていく上で大いに参考となる。第 10 章、第 11 章にのべられる人

間の作業能に関する環境の影響、人体計測は、従来の身体運動学に盛りこまれなかった客観的、定量的計測法がのべられており、動作分析に生じる誤差が少ない。車椅子計測をはじめ食事動作時の分析、機器との関連、フォローアップにおける家庭訪問、職場における人間動作のチェック等適切なアドバイスを与えることができるには少くともこの書が必要となろう。但しこの本には身体障害者に対するデータは載っていない。それどころか第 2 次世界大戦中の正常人を上まわる陸海空の軍人を対象として収集されたデータである。操作具も座位におけるパイロットの動作である。しかし合所動作に活かす計測上、基本的なものに変わりはない。したがって、われわれはケース状況に応じて Ergonomy をすすめる必要があらう。

(コロナ社, 539 頁, 4,600 円)

(神奈川総合リハセンター 田口 順子)

新しい交付基準による義肢装具

橋倉 一裕・飯田卯之吉 編集

著者らによれば、わが国の補装具の開発が先進国に比較して非常におくれてきた原因は 2 つあるという。第 1 は補装具に関する制度の矛盾であり、第 2 は身障法における基準(各種の制度に定められた補装具の価格の基準となる)が長い間改善されなかったことにある。そのため新型の開発が頭打ちになっていた。行政的支給システムをいかにすべきかが今後の補装具の発展のカナメになっていると指摘している。

補装具の製作および支給に関する法規は、補装具の発展にとって不可分の関係にある。しかし我々はこの点について比較的無関心に過ぎて、患者に対する技術的適合のみを追究しがちである。これら法規やシステムについて、教育の場で取り扱われることもない。

本書は、行政的知識の少ないリハビリテーション関係者や補装具製作者などのために、新しい交付基準による補装具について、理解しやすい手引書として書かれたものである。

補装具関係の法的種類と、それらがどのような体系をなしているのか、義肢装具装着の必要性と時期、どのような名称の義肢装具がどのような場合に処方されるのか、各パーツの名称と機能、実際の処方例を中心としてまとめている。

すべての補装具がとりあげられており、その発展の歴史的背景、構造、適合製作上の留意点、材質の種類、強度、適否などにいたるまで簡潔に説明がなされている。

補装具の製作支給にたずさわる者ばかりでなく、学生にとっても、補装具を勉強する上で恰好の書である。

内容は、I) 補装具に関する法規、II) 義肢、III) 装具、IV) 車椅子、V) その他の装具、VI) 視力障害関係、VII) 聴力言語障害関係、付 1) 補装具の種目、付 2) 全国更生相談所、更生指導所一覧、付 3) 義肢協会会員名簿となっている。

(医学書院, A 5, 290 頁, ¥ 4,000)

(宮城拓杏園 花村 郁)